2020 年 5 月 3 日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　復活後第三主日礼拝　　NO.1118
聖　　書　　詩編 139:7~10／ローマの信徒への手紙 8:9~11
説　　教　　『 私の霊は神の霊 』

季節は巡ってもう初夏。毎年この時期には自然の息吹に圧倒されるが、モンスーン気候地帯に著しい「輪廻=霊魂不滅」の感覚には、この力強い生命循環が多く影響してそうだ。輪廻は人間や動物を横断して霊魂の不滅を説くが、キリストの復活によって示された私たちの永遠性と何が違うのか。

「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるだろう(ﾛﾏ 8:11)」。
「もしも～ならば～」という条件付の言い方がひっかかるが、これは修辞法で、直前の「8:9~10」も同じ仮定形の書き方。キリスト者には「霊が宿っているはず(8:9~11)」という前提を強く意識させるための表現にほかならない。
また「神の霊」と「キリストの霊」を同じものとし(8:9)、「イエス」と「キリスト」を同じものするのも(8:11)、推敲された文書ゆえに意図あっての混成だろう。

「死ぬはずの体」は「霊」によって死から解き放たれ(8:11)、キリストの復活に与り、終末的な永遠の命を生きる(Ⅱｺﾘﾝﾄ 4:14)。したがって、自然の生命循環に倣った「霊魂不滅」とは違う。四季は円環的でも、歴史は「神の完成」に向かって進んでいる。御心に従い、私たちは奥へ奥へと踏み込む。

私たちの内には、神の霊、キリストの霊が宿っている(ﾛﾏ 8:9)。イエスを、キリストを、死者の中から復活させた神の霊が、キリストの霊が、私たちに宿っている(8:11)。すなわち、神の霊と、キリストの霊と、私たちに内在する霊は、一つなる霊であるらしい。
だから命なる「聖霊」の息吹は、いわば風(霊)として、私の「内に」吹き込んできたり、私から「外へ」吹き出たりしている。比喩としてはそのまま「呼吸(霊)」が分かりやすいかもしれない。吐いて、吸って、吐いて、吸って…。

神の霊と、キリストの霊と、私の霊が一つであるとは、どういうことであろうか。神は隠れた聖なる方であるが、俗なる私たちがその方の内に迎え入れられている。神の義は人間の義を超えている。神の領域は生と死に分けられない。
神は、聖人らの罪を明らかにし、悪人らの罪を赦し給う。教会は己が義によって人を裁くが、キリスト者は己が霊に裁かれて御心に還る。人間は混乱するが、私たちに宿る霊はズシリとあり給う。人間は驕り高ぶるが、霊は冷水をぶっかけて私たちを目覚めさせる。
いつの日か、私たちが御国へ昇ると霊は共にあり、地獄に堕ちたとしても神の霊は共におられる。

「天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます(詩編 139:8)」。これが神の霊と、キリストの霊と、私の霊とが一つであることの真実。
「曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも、あなたはそこにもいまし、御手をもってわたしを導き、右の御手をもってわたしをとらえてくださる(139:9~10)」。
神の右(義)手が私を捉えて、けっして手放さない。

「キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっている(ﾛﾏ 8:10)」。
「義」とは十字架。肉の基準ではおぞましい処刑具だが、キリストの愛ゆえに、神はこれを義として私たちを自らの霊の内に迎え入れた。人間の罪に、神の救いが現れている。

★

≪おまけのひとこと≫
憎悪と権力が結束した十字架　拘置所の絞首台もまた十字架の変形か　そこにキリストの愛がある
人間の断罪を超えて赦され義とされる　義は命　命は神の息(霊)　私に永遠の息が出入りしている